昭和学士会誌　第76巻　第2号〔97頁，2016〕

特　　集　泌尿器科学の最前線

巻 頭 言

昭和大学医学部泌尿器科学講座
小川　良雄

前回の泌尿器科学の特集「最新の泌尿科手術」2001年から15年が経った．この間での泌尿器科学の診断法・治療法の進歩は目を見張るものがあった．

腎細胞癌は健康診断や人間ドックでの腹部超音波検査の普及と他疾患の全身検索での腹部CTで発見される偶発癌が格段に増えてきた．治療については手術療法が基本であるが，従来の開腹による根治的腎摘除術から腹腔鏡によるアプローチが主体になり，最近da Vinci（ダ・ヴィンチ）による腎部分切除術が保険収載され今後の普及が期待されている．転移巣に対してインターフェロンなどのサイトカイン療法から分子標的薬治療が普及して生存期間が格段に延長した．腎細胞癌の現況を森田順先生に解説してもらう．

尿路上皮癌治療の現況を井上克己先生に解説してもらう．腎盂尿管癌に対する尿管鏡を用いた診断法も開発された．手術療法も腹腔鏡が用いられる．進行した尿路上皮癌に対する化学療法もM-VAC（メトトレキサート，ビンブラスチン，アドリアマイシン，シスプラチン）による副作用の大きな治療から同等の効果で副作用の少ないGC療法（ゲムシタビン，シスプラチン）に移行していった．

前立腺癌は近年患者が増加し，特に2003年1月の今上陛下の前立腺癌手術のニュースから前立腺癌のPSA検診も飛躍的に増加してきた．手術におけるエポックメーキングはダ・ヴィンチに代表される手術支援ロボットによる前立腺全摘術が保険収載されたことにより飛躍的に手術が安全確実に行うことができるようになった．また薬物療法では従来の抗アンドロゲン薬だけでは治療の限界があったが，新規抗アンドロゲン薬さらにタキサン系抗悪性腫瘍薬の登場により治療が格段に進歩した．前立腺癌について深貝隆志先生に概説していただく．

下部尿路機能障害では冨士幸蔵先生に，その概念の成り立ちと診断法，最近の治療の発展について詳述していただいた．従来，慢性膀胱炎や頻尿症といった疾患名から過活動膀胱への定義の変化，また男性における前立腺肥大症との関係についても触れられている．治療薬もα1阻害薬，抗コリン薬のみならず，β3刺激薬，PDE 5阻害薬の登場で選択肢が多彩となり，症状に対してきめ細かく選べる時代となっている．

男性機能障害では男性更年期障害と勃起障害について本邦を代表する専門家である佐々木春明先生に解説してもらった．男性更年期障害が多くの男性に関わっていることに気づかれるはずである．男性更年期障害はQOLを阻害するため放置してはいけない．また勃起障害について多くの情報を伝えていただいた．日本人男性がいつまでも元気でいるために，ひいては日本が元気になるために正面から取り組むべき疾患である．

尿路結石症は，中里武彦先生から医療経済を考慮したこれからの尿路結石症治療と題して今までと違った切り口で治療の現況に迫ってもらった．尿管結石症は地球温暖化とともに生涯罹患率も近年では10%を超えてきており，国民病とも言えるほど多くの患者がその疝痛発作に苦しんでいる．治療法の発展により体外衝撃波や内視鏡手術も多くなり医療コストも無視できないレベルとなっているので大変示唆に富んだ論文となっている．

以上の6論文により学士会の読者が泌尿器科学の最先端に触れていただければ幸いである．